

212N29

RŌMAJI HAYAMANABI.

YATABE RYŌKICHI.

矢田部良吉著

羅馬字早學び

羅馬字會

811.8Y629r

RŌMAJI HAYAMANABI.

YATABE RYŌKICHI.

矢田部良吉著

羅馬字早學び

羅馬字會

新書

東京新橋十間文藝社發行



羅馬字早學の緒言

此小冊子は羅馬字會の書き方取調委員が議定したる書き方を基礎とし初學の人の學び易からんが爲に其足らざる所を補ひたるものにて羅馬字會の書き方と矛盾する處なし

此書に記載する所の書き方は左の三箇條を遵守して定めたるものなり

第一 假名の用ひ方に據らずして發音に従ふこと

第二 尋常の教育を受けたる東京人の間に行はるゝ發音を以て成るべきだけ標準とすること

第三 羅馬字を用ふるには其子字は英吉利語にて通常用ふる音を取り其母字の伊太利亞語の音即ち獨逸語又は拉丁語の音を採用するよし

何故に第一の箇條を遵守せしやと云ふ問ひに答へて云はんには假名遣なるものは甚煩雜にして之を學知すること頗る困難なり假名遣ひに従ふときは現今コーと發音する語にてはカウ、カフ、コフ、クワウ、クチウ、コホ、等の書き方を一々區別しキョーと發音する語にてはキヤウ、キヨウ、ケウ、ケフ、を區別しトーと發音する語にてはタウ、トウ、ダフ、トフ、トホ、トチ、を區別せざるべからず其他類例多ければ此等の區別を一々語に就て學ぶは實に煩勞に堪へざる事なり畢竟文字は思想の符號なる言語を記する器械に過ぎざれば可成たけ簡便にて使用し易きを宜しとす書くまとの易からざる文字を學ばんが爲に多くの時日を費せば實地の知識を得んが爲に用ふべき時日の減少するは親易き道理なり又何故に第二の箇條を遵守せしやと云ふ我國各地方の語音は一様ならざれば全國普通の書き方を制定するは素より爲し得べき事に非ず

故に最盛大なる地方の發音を標準とせるを便なりとし東京人の發音を以て成るべきだけ標準としたり抑東京の數百年來各地方人民の輻湊して成りたる都府なれば其語音の各地の語音混同し全國語音の平均とも云ふべきものに近くして諸方の人に通し易く且つ大政府の在る處學士紳士の集合する處なれば政治上智力上社會上の勢力之に比すべき地他になし故に向後漁船漁車印刷等の便愈開くるに従ひ東京の語音は愈廣く全國に行ゆるに至らんことを辨を俟たず加之何れの地にてても下等社會には發音の誤謬少なからざるものにして東京の下等社會も亦此通弊を脱れざれども普通の教育を受けたる東京人の發音は他の地方の人に比較し誤謬多きに非ざるが如し或る地方にては教育ある人と雖もツとチとを混ヒツとヂとを混ヒシとスとを混ヒジとズとを混ヒイとユとは一種特異の音を附す又或る地方にて

はり、イとを混じ、ロとドとを混じ、リヨとジヨとを混ず、此類の誤謬は多少各地方にあるならん甚しきに至りては、イ行の音とウ行の音とを盡く混同する地方あり、東京人も亦ジとヂとを混じ、ズとヅとを混ずれども、是は東京に限らず、殆ど全國皆然り、余が知る所にては、其區別をなす地方は僅に柳河、佐賀、久留米、高知あるのみ、又東京の人は、クワ、グワの音を縮めてカ、ガと呼ぶ、是も亦東京のみに限らず、關八州と勿論、東陸前より西筑前に至までの間に、随分廣く行はるゝ事なり、其他は教育ある東京人の發音中に未だ甚しき誤謬を發見せず、但し東京人はヒとシとを混ずとの譏あれ共、是は下等社會に限る事なり、蓋し何の國にても國語に於て發音の誤謬又は不正の發音と云ふものは、其廣く全國に及ぼし、教育ある人にも普く及ぼすときは、誤謬ならざるに至るものなり、右の理由を以て成べきだけ、東京人の發音に従ふ事とせり、但し、クワ、グワ

の二音は *kwā, gwā* と書くとも *ka, ga* と書くとも各人の好に任すこととせり

又何故に第三の箇條を遵守せしやと云ふ、子字の用法は歐洲諸國にて一定せず、例へば *c, ch, j, s, v, w, z* 等は英吉利語の音と獨逸語の音と異り、*ch, h, j, qu, r* 等は佛蘭西語の音と英吉利語の音と異なるが如し、故に歐洲中一箇國の子字用法に據るを便なりとす、諸國の子字用法を取捨し、或は子字に新規の音を付して一種の用法を定むるに却て大に不便なるべし、然るに英吉利語の子字用法は日本語を書くに用ひて都合なく、加之東洋に於ては従來英語を用ふることも多く、殊に先般文部省より小學にて英語を教授することを許すとの布告出でし以來、本邦小學に於て漸々英語を教授するの傾向あれば、向後英語は益々本邦に行はるゝに至るなるべし、故に羅馬字を以て邦語を綴るには英語の子

字用法に據るを便なりとす且又慶應三年に横濱の平文先生が和英對譯辭書を著しされし以來羅馬字にて邦語を綴る者は内外人を問はず多くは英語の子字用法に従ひ輒近に至りては獨逸人の設立せる亞細亞協會にても日本語を書くには英語の子字用法に従ふと聞きたれば愈々以て英語の子字用法に據るの便利なること明かなり偕又母字に至りては日本のアイウエオは其音一定して伊太利亞獨逸等の *ai, eu, oi, oo* の如くなれども英語の母字の發音甚種々にして到底之に従ふこと能はざるが故に英語の音をば勿論採用せず

右の如く三箇條を遵守して書き方を定められ共各人の望通りと申中々得云ひ難し然るに日本人の此書き方を非難するものと外國人の此書き方を非難するものと自ら其論點の異なるは亦奇と云ふべし今其一二例を擧て相互に問答せしむとせば左の如くなるべし日本人曰く

タチツテトは *ta, ti, tu, te, to* と書くべしチを *chi* と書きツを *tsu* と書くは五十音の理に適はずと外國人之に答へて曰くチ、ツの全然 *chi, tsu* の音にては、*tu* の音に非ず君が申さるゝ如くすれば羅馬字に付ざるに新規の音或は歐洲にて稀に付する所の音を以てするなり御尤とは申し難し五十音に御拘泥は御止めの方宜しかるべしと外國人曰く去は *kiyo* と書き略は *riyaku* と書き百は *hiyaku* と書き響は *hiyo* と書くべし是等の音を *kyo, ryaku, hyaku, hyo* と書くの母音に當める日本語の性質に反すと日本人答へて曰く君が申さる如くすれば去は清と混じり畧は利益と混じり百は非役と混じり響は費用と混じり御尤とは申し難し百非役等の音をば日本人は常に明かに區別それは同様の書き方を以て之を表するは甚不條理なり恐くは君は日本語の拗音の性質を御承知なきか又は平文先生の辭書に御拘泥なさるゝが如しと以上述る所は

余ら想像の説にて唯各人の満足する書き方を制定するは中々六ヶ敷事なるを示すのみ

されど成るべきだけ書き方の一定するは甚緊要にして最望ましき事なり然るに羅馬字會にて制定したる書き方は各人を満足せしむる能はざるも頗る簡便にして實際に適當なれば多數の人は之にて満足するならんと考ふるが故に其廣く世間に行はれん事を冀望す

明治十八年五月

矢田部良吉識す

目録

第一章	羅馬字の名	羅馬本字及び伊太利亞字
第二章	母字	短音
第三章	撥る音	ts, tsu, tsu 等の音
第四章	音便	wo 及び ye の用ひ方
第五章	長音	
第六章	クワ、グワの音	
第七章	書き方の特則	
第八章	促る音	m, b, p の前にある撥る音
第九章	言葉の切り方	
第十章	句點及び頭字の用ひ方	
第十一章	羅馬字の筆記体	

第十二章	數字	
第十三章	羅馬字にて書ける文章の例	手紙
	假名と羅馬字との比較表	

羅馬字早まなび

第一章

○第一節 羅馬字即ち横文字は二十六字にて其名を假名と羅馬字とにて記すこと左の如し

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z
a	be	chi	de	e	fu	ge	ha	i	ji	ka	el	ma	na	o	pe	ku	ra	sa	ta	u	vu	wa	eks	ya	ze
ア	ベ	チ	デ	エ	フ	ゲ	ハイ	ジ	カ	マ	ナ	オ	ペ	ク	ラ	サ	タ	ウ	ワ	ヤ	ゼ				

右の二十六字の中LQVXは日本語を書くに用ひずLの名はエルの如くなれども之に異りVの名はヅと書けば當る様なれどもウの濁りハ日本語になくXの名はエクスと似たれども之に異なるが故に以上三字の名は假名にて記さず置きり委くは西洋語を學びたる人に就きて問ふべし

4

bara バラ hebi ヘビ buta ブタ kabe カベ ibo イボ ada アダ ude ウデ
 kado カド fune フネ toga トガ gama ガマ hagi ハギ gusoku グソク
 kage カゲ tamago タマゴ hama ハマ hi ヒ hera ヘラ hoko ホコ
 jama ジャマ kiji キジ juzu ジュズ gejo ゲジョ kaki カキ kikori キコリ
 kuni クニ kega ケガ komo コモ makoto マコト miya ミヤ musume ムスメ
 me メ mogura モグラ na ナ kani カニ numa ナマ neko ネコ noki ノキ
 sara サラ hari ハリ kare カレ koro コロ sadame サダメ sugé スゲ
 semi セミ soto ソト tama タマ te テ tori トリ wakare ワカレ yama ヤマ
 yume ユメ yoko ヨコ hiza ヒザ nezumi ネズミ zeni セニ mizo ミゾ
 pa pi pu pe po の例に此に添く第二二節第二三節を見るべし
 ○第六節 二つの子字又一つの母字を連合して表はす所の短き音
 の左の如し

bya	byu	byo	cha	chi	chu	cho	gya	gyu	gyo	hya	hyu	hyo	kya	kyu	kyo	mya	myu	myo	nya	nyu	nyo
rya	ryu	ryo	sha	shi	shu	sho	tsu														

右に列記したる短音は bya, cha, chi, cho, gya, hya, kya, kyo, mya, nya, nyo, pya, rya, ryu, ryo, sha, shi, shu, sho, tsu 等並用する所なれども其他は長音にはあらずと短音には chu を除くの外未だ之を含みたる語を知らず又 hyu, myu 等は短音と並用して pyu に至りては未だ其用例を知らざれば或る場合に於て無きかゝるを知らずと思ひ此に掲げり

右の音を合む言葉の例を左に掲ぐ

byakuri 白菊 cha 茶 chikaki チカキ chokushi 勅使 gyaku 逆 gyo 魚

hyaku 百 kyaku 客 kyogetsu 去月 myaku 豚 nyaku 若 nyoshi 女子
 ryaku 譽 ryoshuku 旅宿 shakuyaku 芍薬 shirushi シルシ shui 主意
 shocho 處置 tsuki ツキ

pya 及び pyo の例は第二十二節を見るべし

右の外に二つの子字を一つの母字を連合して表はす所の二音あり
 左の如し

gwa^{クワ}
 kwa^{クワ}

此二音の用ひ方の第十五節を見るべし

第三章

○第七節 撥の音は假名のハカ當る字なるロを母字の後に附して之
 を表はす其通常なるものを左に掲ぐ尙第三節を見るべし

an アン ban バン bin ビン bun ブン ben ベン bon ボン dan ダン

den デン don ドン en エン fun フン gan ガン gin ギン gun グン
 gen ゲン gon ゴン han ハン hin ヒン hen ヘン hon ホン in イン
 jan ジェン jin ジン jun ジュン kan カン kin キン kun クン ken ケン
 kon コン man ヲン min ミン men メン mon モン nan ナン nin ニン
 nen フェン non ノン on オン pan パン pin ピン pun プン pen ペン
 pon ポン ran ラン rin リン ren レン ron ロン san サン sun スン
 sen セン son ソン tan タン ten テン ton トン un ウン wan ワン
 yon ヨン zan ザン zun ズン zenゼン zon ゴン chan チャン chin チン
 shan シェン shin シン shun シュン tsun ツン kwan クワン gwan グワン

○第八節 東京及び其他諸國にて權入サン、オ、父、サ、ン等をコン、ン、
 シ、ン、オ、ト、ン、ハ、ム、シ、カ、此のシ、ン、ハ、は羅馬字にて書けば、tsan なり又東京等
 にてト、ガ、カ、ギ、ン、ム、レ、カ、ヅ、カ、ゴ、の如くガ、ギ、ン、ケ、ゴ、の音が語の始めにあ

○第十二節 テニナハのナ及びビハはwo及びyeと書くべし

是は音の儘に書けばo及びeと書くを當然とするが如くなれども
行文中其テニナハなる事を知り易からんが爲メ斯くは定めたるな
り其他のナ及びビエの音ハ皆o及びeと書くべし

第五章

○第十三節 A I U E O の五母字の音を伸ばしてア、イ、ウ、エ、
オ、と呼ぶときは字の上に長音の符號即ち「ˉ」を附して短き音と區別
す左の如し

Ā ī ū ē ō

子字と母字とを連合したる時も長音の書き方は上に同じ例へば

ばい	びい	ぶい	べい	ぶい	ばい	びい	ぶい	べい	ぶい
bā	bī	bū	bē	bō	kā	kī	kū	kē	kō
ま	み	む	め	も	ら	り	る	れ	ろ
mā	mī	mū	mē	mō	rā	rī	rū	rē	rō

右の五長音の中 ū ō の外は用ふること少なし尙第十六節より第二
十節に至るまでを見るべし

但し歎息詞又は間投詞の「ア」「エ」は Ā ē と書くべし又俗語の「バ
バ」「アニー」「アチー」は babā, anī, ano と書き詩歌四時を「シーカ」「シージ」
と讀むときは shika, shiji と書きて適當なるが如し

○第十四節 平常用ふる所の長音を左に列擧す但し漢字の音を假名
にて書くことは頗る煩はしきものなるをも示さんが爲に漢字を併て
記す其訓は平假名にて記す

bō バウ(暴) ボウ(寛) バウ(芝) ボウ(芝)
byū ビウ(鬱)

byō ビヤウ(病) ビヨウ(鬱) サンバウ(三俵)

chū チュウ(蟲) ナウ(曲) ナウ(整)

12 ehō チヤウ(町) チヨウ(寵) テウ(鳥) テフ(蝶)
 dō ダウ(堂) ドウ(動) モンダフ(問答)
 fū フウ(封)
 gū グウ(寓)
 gō ガウ(號) ガフ(合) ゴウ(藹) ゴフ(業)
 gyū ギユウ(牛) ギウ(牛)
 gyō ギヤウ(行) ギヨウ(凝) ゲウ(堯) ゲフ(業)
 hō ハウ(砲) ホウ(奉) ハフ(法) ホフ(法) ほほ(頬)
 hyō ヒヤウ(兵) ヒヨウ(冰) ヘウ(表)
 jū ジユウ(銃) ジウ(銃) ジフ(十) チュウ(住) チウ(住)
 jō チヤウ(嬢) デウ(條) デフ(鐸) ジヤウ(讓) ジヨウ(繩)
 kū クウ(空)

kō カウ(孝) コウ(公) カフ(甲) コフ(劫) クラウ(廣) クチウ(眩) ちほり(氷)
 かうべ(首)
 kyū キユウ(求) キウ(求) キフ(給)
 kyō キヤウ(鏡) キヨウ(凶) ケウ(橋) ケフ(夾) けふ(今日)
 mō モウ(蒙) マウ(孟) まをま(申) まうづ(詣)
 myō ミヤウ(名) メウ(妙)
 nō ノウ(腦) ナウ(腦) ノフ(納) ナフ(納)
 nyū ニユウ(乳) ニウ(乳) ニフ(入)
 nyō 子ウ(纒) 子フ(捻) ニヨウバウ(女房)
 ō オウ(鷗) オウ(弘) アウ(央) アフ(凹) ワウ(往) ねほ(大) あおぎ(扇)
 ねふし(瘡癩)

13 pū ナンプウ(南風)

pō ホンババ(本邦) ネンボウ(年俸) セツパン(説法) セツボフ(説法)
 pyō イツピヤウ(一兵) ロツベウ(六使)
 rō ラウ(牢) ロウ(弄) ラフ(蠟) ロフ(蠟) かげろふ(蜻蛉)
 ryū リユウ(留) リウ(留) リフ(粒)
 ryō リヤウ(驪) リョウ(陵) レウ(了) レフ(獵)
 sū スウ(數)
 sō サウ(巢) ソウ(走) サフ(颯) ソフ(颯)
 shū シュウ(秋) シウ(秋) シフ(習) シウ(舅)
 shō シヤウ(聖) ショウ(升) セウ(笑) セフ(捷)
 tō タウ(燈) トウ(燈) タフ(踏) トフ(踏) とほめ(遠目) とを(十) たうげ(嶺)
 たあげ(嶺) ねとう(弟)
 tsū ツウ(痛)

yu イユウ(右) イウ(右) ユウ(遊) イフ(邑) ゆあぐれ(夕暮)
 yō イヤウ(養) ヤウ(養) イョウ(容) ヨウ(容) ヨウ(遙) ユフ(葉) やうや
 く(漸)
 zū ユウツウ(融通)
 zō サウ(造) サフ(雜) ソフ(雜) ソウ(増)

第六章

○第十五節 火、回、畫、貫、活、及、び、臥、外、願、月、等、の、音、の、假、名、に、て、ク、ワ、ク、ワ、イ、
 ク、ワ、ク、ク、ワ、ン、ク、ワ、ッ、及、び、グ、ワ、グ、ワ、イ、グ、ワ、ン、グ、ワ、ッ、と、書、け、ど、も、假、名、の、
 如、く、に、kwa, kwai, kwaku, kwan, kwatsu 及、び、gwa, gwai, gwan, gwatsu
 と、讀、む、地、方、も、あ、り、又、ka, kai, kaku, kan, katsu 及、び、ga, gai, gan, gatsu
 と、讀、む、地、方、も、あ、り、故、に、各、人、の、好、に、從、ひ、何、れ、に、な、り、ど、も、書、く、べ、し
 ク、ワ、グ、ワ、の、勘、音、を、縮、め、て、ka, ga と、呼、ぶ、こ、と、は、緒、言、に、も、云、を、如、く、關

八州は勿論東陸前より西筑前までの間に廣く行はる抑此類の拗音
 即ちクエ(花)クエン(眷)グエン(源)クワウ(光)等は昔は假名の如くに kwe,
 kwen, gwen, kwō を發音せしものならん。今は此等を ke, ken, gen,
 ko と讀むことになれり。花、眷、源の音の如きハ後世假名にてもケ、ケン、
 ゲンと書きクエ、クエン、グエンと書かざるに至れり。方今此類にて
 尙ほ殘るものはクワとグワなれども之を kwa, gwa と發音する地
 方に於ても英人がクワンテテ (quantity) なる語を發音する如くに
 ハ分明ならず又此等の拗音の漸々變じて直音とありたる例ハ佛蘭
 西語等にある所なれば我邦語にても追々にハ直音に變じて假名の如
 くに讀む人なきに至るならんか

余ハ火臥等の音を羅馬字にて書くときハ ka, ga とすることに定めた
 れども素より他の人も斯くすべしと云ふにハあらず左に其例を擧ぐ

kankei 關係 kaichū 懷中 katsuji 活字 kahan 過半 kakuran 霍亂
 gan-yaku 丸藥 igai 恣外 inga 因果 nigatsu 二月

第七章

○第十六節 エイ(英)ロイ(永)ケイ(計)グイ(藝)サイ(海)クイ(稅)クイ(工)クイ(泥)
 キイ(歸)クイ(古)クイ(米)カン(權)クイ(明)クイ(禮)等の音ハ ei, ei, kei,
 gei, sei, zei, tei, dei, nei, hei, bei, kenpei, mei, rei を讀へん。ē, ē, kē, gē
 等又書くべからず。第十三節を見合ふべし。

○第十七節 モイ(新嘗)メシ(饗者)イヒワケ(言譯)チヒサキ(小)キイ
 (紀伊)クイ(古)等の音ハ Niname, meshi, iwake, chiisaki, Kii, hito を書
 べ Niname, meshi 等を讀へん。第十三節を見合ふべし。

○第十八節 ホモ(思)ホン(讀)ホノ(追)ソノ(添)マヨ(迷)等の動詞ハ
 omōu, kou, oi, sou, mayou を書べ。omō, kō, o 等を讀へん。なからず

是は「家ヲ思フ」ie wo omou 「思フ人」omou hito 「思フ人」omouran 「思フ人」omoubeshi 「思フ人」omou nari 等の場合ト用スル規則ナリ
 「思フ人」思フ人「思フ人」思フ人「思フ人」思フ人「思フ人」思フ人
 くべし

俗語の「カウ、ホキマ、ホウ」等ハ yuko, yukimashō ヲ書クベシ
 子ガフ(願)カナフ(適)ヲラフ(笑)等を子ガウ、カナウ、ワミウヲ讀むときは
 negau, kanau, warau, ヲ書クベシ
 読むベシ

○第十九節 スクフ(救)スフ(吸)ヌフ(繰)クルフ(狂)フルフ(振)等の動詞は
 sukuu, suu, nuu, kuruu, furuu ヲ書キ sūkū, sū, nū 等ヲ書クベシ
 スクヒテ、スヒテ等をスクフテ、スフテヲ書キ sūkūte, sūte ヲ
 書クベシ

○第二十節 イフ(云)なる動詞は iu ヲ書クベシ
 イヒテをイフテヲ書キ iute ヲ書クベシ

○第二十一節 馬、梅の訓は假名に「マ、メ」なるイハシメを以テ
 ヲ書キ「マ、メ」なるイハシメを以テ

第八章

○第二十二節 促る音ハ假名遣ハの如何ト關ラズ其次の音の子字一字
 を重複シテ之を示サシ但し次の音の「ハ」始まるものは之を重複セザ
 して前以テ之を加ヘシ例ハ

kokka 國家	mekki 鍍金	kekku 結句	sekken 節儉	kekko 結構
shuppan 出版	zappi 雜費	rippuku 立腹	ippen 一遍	teppō 鐵砲
hossu 欲ス	kassen 合戰	dassō 脱走	metta 滅多	ketten 欠典
shitto 城妬	tekyō 鐵橋	roppyō 六俵	happyaku 八百	tassha 達者

Sesshū 攝州 nassho 納所 ittshū 一通
mitchaku 密着 nitshū 日中 shutchō 出張

○ 兼井三鶴 國名の「ノ」字に「一」の終ひを以て羅むることなしと雖も、
ハ節に連ぐられたるも其次の音「p」pに治まる時は「p」に當る其他は皆
ロなり例へば

semnan 千萬 gimmi 吟味 semnu 事務 hammo 繁茂 tembatsu 天罰
tembin 天秤 shimbuu 新聞 sembei 煎餅 jimbo 人望 kampan 甲板
gempin 現品 kimpun 金粉 empen 縁邊 genpon 原本
handan 判斷 nangi 難義 nanji 汝 rinki 臨機 Ninna 仁和 bannin 番人
Tennō 天王 kenri 權利 junsa 巡査 hentō 返答 danwa 談話
senzo 先祖 kenchō 縣廳 hongyaku 反逆 inkyo 隱居 shinn'yū 進入
enryo 遠慮 Banshū 播州 shintsū 心痛

第九章

○ 兼井四節 綴つ獨立の語に別々ト書くべし例へば

hito 人 inu 犬 ie 家 shokumotsu 食物 kuran 食 sumau 住

但し左の接合は「ハイン」即ち「一」の符號を以て語を分斷するこ
とあり

(第一)二つの語を以て成りたる語として第一の語は「p」に終り第二の
語は母字又は「p」に始まるものは「ハイン」を以て其二語を區別すべ
し例へば

原因は gen-in と書くべし genin と書けば「下人」と混す
原案は gen-an と書くべし genan と書かば「下男」と混す
森海は kan-yū と書くべし kanyū と書かば「加入」と混す
ten-un 天運 kin-en 禁苑 kon-in 婚姻 kun-on 君恩 kan-yō 肝要

(第二)二つ以上の語を以て成立ちたる語にして之を分斷せずんば意味の疑はしきもの或は頗る長きものはハイフンを以て之を分斷せざるも妨なしと雖もハイフンに成るべきだけ少く用ふるを宜しとす例
くば

i-shika 猪鹿 Yamato-damashii 日本魂

○第廿五節 de, ga, ka, kara, koso, made, mo, ni, nite, no, to, wa, wo, ya, ye, yori, zo 等の助語は之を其附屬する所の語より離して書くべし例
くば

Ware wa yuku. Kaze no fuku toki. Natsu ni narikeri. Yori mo naku.

Shika no naku zo kanashiki. Michi koso chikakere. Hi wo mo mizu wo mo osorezu. Yama to wa miezu.

○第廿六節 動詞のみに附屬して他の詞に附屬せざる助語は動詞に連接して書くべし例へば

yukishi, yukiki, yukite, yukazu, yukanu, yukedomo, yukitsutsu, yukuran, yukikeri, yukubeshi, yukeba, yukaneba, yukimasu.

但し助語二つ以上の音を以て成るときはハイフンを以て之を動詞より分斷するも妨なし例へば

yuku-bekarazu, yuki-kerashi.

○第廿七節 文章を綴るよ方り語の切り方よは随分疑を生ずべき点多けれども一々掲げず上の規則の其要頭を示はのみ尙左に一二の例を擧げん

行ニケリ、行キテシ、行カバヤ等ハ yukinikeri, yukiteshi, yukabayaya と書くべし

行キ子カシ、行クヅカシ等ハ yukine kashi, yuku zo kashi と書くべし
 タリは動詞のみならず名詞にも附屬することあるが故に「羅馬字にて
 日本語の書き方」には多くは動詞より離してめれどを動詞に附屬する
 ときハ離さずに書く方宜しきが如し例へば yukitari
 ワガ、カノ、コノ、ソノ等ハ waga, kano, kono, sono と書くべし
 賢キ、賢シ、面白キ、面白シ等ハ kashikoki, kashikoshi, omoshiroki, omoshiroshi
 と書くべし
 或ハ、既ニ、終ニ等ハ aruiwa, sudeni, tsunni と書くべし
 水ヲバ飲マズ、水トモ見ユ等は mizu wo ba nomazu, mizu to mo miyu と
 書くべし
 何トテ、是トテ等のトテは tote と書くべし

第十章

○第廿八節 句點及び頭字の用ひ方ハ英吉利の文に異なることなし
 句點の用ひ方ハ初學の人には甚惑ひ易きものなれば可成たけ詳に述
 ぶべきなれども之を委しく書かんとすれば頗る長章となるが故に左
 には唯其概畧を示す

○第廿九節 肝要なる句點六つあり即ち

- 第一 , コンマ
- 第二 ; 半コロ
- 第三 : コロン
- 第四 . 止リ
- 第五 ? 疑問
- 第六 ! 歎息

コンマは句切りの最小なる區分を示すに用ふ例へば

Kaze no tsuyoku fuku toki wa, ie no taoruru koto ari.
 Kinō wa atsuku mo naku, samuku mo naku, kaze mo fukananda.
 Kono bunshō no imi wa, hayaku itte mireba, kuni ga osanaru to iu
 koto ja.

半コロンはロンマを以て示したる區分より大なる區分を示すに用ゑ
 例へば

Aru hito chin to roba wo kaitari. Roba wo ba tōku unaya ni tsunagi,
 kau ni mame ya kusa wo motte shi; chin wo ba chikaku katawara ni oki,
 kau ni umaki mono wo motte seri.

コロンは半コロンを以て示したる區分より更に意味の完結したる區
 分を示すに用ゑ
 是は前に掲げたる二つの句點の如く屢用ひず長き句切りの中には

往々用ゑることあり左に短き句切に用ゑる一二例を掲ぐ

Mainichi tsutomete undō subeshi: undō wa karada no kusui naru zo yo.

(此文中のコロンの半コロンを換へるを宜し)

Kan-yō naru kuten mutsu ari: dai ichi, Komma; dai ni, Hankoron; dai
 san, Koron; dai shi, Tomari; dai go, Gimon; dai roku, Tansoku.

止りは句切りの意味完く終りたるをき即ち一句切りの終りに用ゑ前の
 數例にて此句點の用ひ方は明なるべし尙一例を擧げん

Ame futte tsuchi katamaru.

疑問は疑問を表はす句切りに用ゑ例へば

Kumo no izuku ni tsuki yadoruran?

Anata wa nani ga o suki de gozaimasu?

歎息は感歎を表はす句切りに用ゑ例へば

Aware, kotoshi no aki mo inumeri!

A, ware hodo un no warui mono wa nai!

○第三十節 右の外符號數種あり其主たるもの左の如し

一 横線

() 括弧

[] 鉤括弧

“ ” 引用

— ハイフン

横線は文句の組立急に變じたる時杯に用ふ例へば

Ware yori tadashiki hito wa ari ya? Ware yori naoki — saredo, jiman
suru koto wa ware konomazu.

又例を擧げて論ずるとき「次ノ如シ」下ノ如シ等の後にコロンを横線と

を用ふることもあり例へば

Kuten no mochiikata wa tsugi no gotoshi:—

括弧は挿註に用ふ例へば

Kono fune wa Shimizu (Suruga no minato no na) yori kitareni.

鉤括弧は原文よなき語を挿入する時に用ふ例へば

Tada on namida ni nomi kakikurete, tsurenaku mieshi ariyake [no tsuki]
mo katabuku made ni navinikeri.

引用は他書より文句を引用するとき又は文中に他の人の談話を其儘
に寫すときにも用ふ例へば

“Manande toki ni kore wo naranu” to wa Rongo no hajime ni miyu.

Aru hi ondori ga mendori no tame ni e wo hiron tote, futo wara no naka
kara taana wo midashite in ni wa:—

“Kore wa kekō na tama ja. Konomu hito wa sazo hoshigaru daro. Shikashi washi wa sekai-ju no shinju yori, hito-tsubu de mo nugi no hō ga yoi.”

引用の文短きときは其前の句點はコンマを用ひ少しく長ければコロンを用ひ頗る長くして別の段落をなす時はコロンと横線とを用ふ(上の例にては引用文頗る長しとも云難けれども別段落とまで書きたればコロンと横線とを用ひたり)

ハイフンは第二十四節第二十六節の場合又は二行に跨がりたる一語の其二語に非ることを示す爲に行の終に用ふ

○第卅一節 頭字は一句切りの初語の初字、固有名詞、尊稱等の初字に用ふ其用例の前節より多し尙一二例を左に擧げん

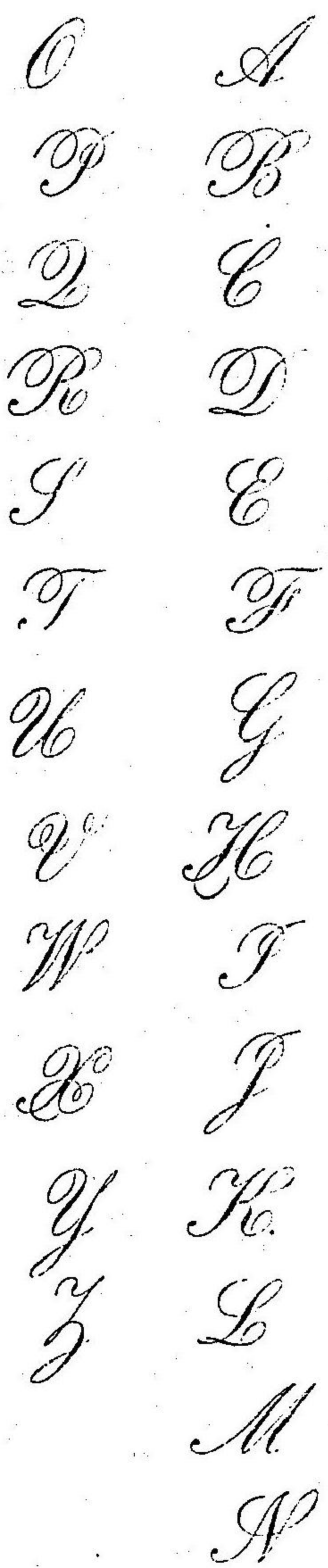
Toyotomi Hideyoshi. Minamoto no Yoritomo. Daijō Daijin. Tokyō.

詩歌は各行皆頭字を以て始む又書物及び論文の表題は頭字のみを以て書くを通例とす又文中格段に著しくせんと欲する語の初字も頭字を用ふることあり

第十一章

○第卅二節 前節まで用ひたる羅馬字は印刷に用ふるもの即ち印刷体楷書にて筆よて書くときは筆記体(草書)を用ふ左の如し

頭字



a b c d e f g h i j k l m n
 o p q r s t u v w x y z

筆記体にて書きたる語の例を左に掲ぐ

Nippon *Shina* *Chosen* *Jando* *Amerika*
ame *kaze* *yuki* *kaminari* *inabitaru*
yama *tani* *kawa* *ike* *mizumi*
oya *kyōdai* *oji* *chichi* *otoko*
shonotau *fude* *pen* *kami* *tsubue* *zashiki*

Musashino *Shenkei* *Taira no Kiyomori* *Nitta Yoshinaka*
matu *tate* *ame* *kashi* *mokusei* *sazanka*
fana *hioi* *kyōgo* *maguro* *hirame* *same* *unagi*
chawan *debin* *yakaba* *kama* *nabe* *hibachi* *gotoku*
kome *awa* *omugi* *komugi* *ino* *uri* *kuiri* *gobo*
shōji *fusen* *byōbu* *tsubate* *kabe* *tatami* *todana*
magaki *ngijakui* *samuki* *atateki* *kuruki* *shiroki*

第十二章

○第卅三節 支那羅馬亞刺比亞の數字を左に列擧す

第十三章

○第卅四節 羅馬字にて書きたる文章の例を左に掲ぐ

第一第二は渡邊温氏が譯せられたる伊蘇普物語より取り第三の源隆國卿の今昔物語より取り第四は福澤諭吉氏の文明論之概畧より取り第五は平家物語より取り第六は慈鎮和尚の今様なり

此諸例の中第四の羅馬字にて書く時少しく意味の解し易からざる處あり例へば文中「櫛風浴雨」などの語あれども之を「風ニ櫛リ雨ニ浴ミシ」と書き更れば其意味甚明瞭なるべけれど原文の儘にして置きたり

Ichi	1	I	
Ni	2	II	
San	3	III	
Shi	4	IV	
Go	5	V	
Roku	6	VI	
Shichi	7	VII	
Hachi	8	VIII	
Ku	9	IX	
Jū	10	X	
Jūichi	11	XI	
Jūni	12	XII	
Jūsan	13	XIII	
Jūshi	14	XIV	
Jūgo	15	XV	
Jūroku	16	XVI	
Jūshichi	17	XVII	
Jūhachi	18	XVIII	
Jūku	19	XIX	
Nijū	20	XX	
Sanjū	30	XXX	
Shijū	40	XL	
Gojū	50	L	
Rokujū	60	LX	
Shichijū	70	LXX	
Hachijū	80	LXXX	
Kujū	90	XC	
Hyaku	100	C	
Nihyaku	200	CC	
Sambyaku	300	CCC	
Shihyaku	400	CCCC	
Gohyaku	500	D	
Ropyyaku	600	DC	
Shichihyaku	700	DCC	
Happyaku	800	DCCC	
Kuhyaku	900	DCCCC	
Sen	1000	M	
Sen happyaku hachijū go	1885	MDCCCLXXXV	千八百八十五

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
三十
四十
五十
六十
七十
八十
九十
百
百一
百二
百三
百四
百五
百六
百七
百八
百九
千

II.

ARI TO KIRIGIRISU NO HANASHI.

Natsu mo sugi aki mo take, yaya fuyugare no koro ni narite, aru atataka naru hi, ari domo ōku uchiatsumari, natsu no hi ni toriosametarū e wo hi ni hosu tote, ana yori hikiidashi itari. Kakaru tokoro ni, ito uetsukaretaru kirigirisu yoroboi kite, "Inochi wo tsunagu tame isasaka sono e wo wakachi tamaware" to koeri. Sono toki toshi taketaru ari furikaerimite, "Ikasama gohen wa kirigirisu yo na. Sonata wa natsujū nani wo shite kurasareshi ya? Nani yue shoku ni komararuru ya?" to toeba; kirigirisu ogorika ni kotaete, "Kono natsu wa ito omoshiroku koso aritsure; hana ni tawamure, ha ni nemuri, kuchi ni wa tsuyu, mi ni wa usu-mono, utai mo shitsu, mai mo shitsu,"—to ii mo kiranu ni ari uchiwarai, "Saraba kōryoku wa go muyō nari. Ware ra wa natsu no enten ni se wo sarashite, e wo hakobi, kono fuyu no yōi wo nashitari; yue ni kyō no anshin ari. Naga no natsujū mai utaite, itazura ni hi wo okurishi mono wa, fuyu ni narite wa, uyubeki hazu nari. Ware wa shirazu," to kotaekeru to zo.

I.

WASHI TO KITSUNE NO HANASHI.

Aru taiboku no kozue ni washi su wo kake, kitsune sono moto ni ana wo tsukuri, tagai ni kon-i ni tsukiyai ikeru ga; aru hi oyagitsune tagyō seshi ma ni, washi akushin wo okoshite, waga sumika wa takami nareba, kare yori adagaeshi wa nashi eji to, kogitsune wo kakisarai waga ko no ejiki ni mochisarikeri. Yagate oyagitsune kaeri kite, tonarigara ni arumajiki koto tote ikari, ubawareshi ko wo kaesan koto wo koishi ni, washi sukoshi mo shōchi sezu. Yotte, kitsune wa urami ni taezu, chikaki yashiro no tōmyō wo tori kite, ki no shita yori hi wo hanachi, ono ga kodomo to morotomo ni washi no hina wo ba yakikoroshi, tachimachi ada wo kaeshikeru to zo.

kemono wa aruji wo shiranu mono nareba, hito mo naki sanchū nite ware wo kurawan to omou naran. Kirikoroshite sutebaya tote, tachi wo nukite odoshi-keredomo, sukoshi mo shirizokazu, iyamashi ni hoekereba, kakaru semaki ana nite kurai-tsukarenaba ashikaran to omoite, utsubo yori soto ye odori-idekeri. Sono toki ni kono inu utsubo no ue no kata ni odori-agarite, mono ni kuitsukinu. Aruji sate wa ware wo kurawan tote hoekeru ni wa arakarikeri to miru uchi ni, nani to wa shirazu obitadashiki mono inu to tomo ni ochitari. Inu nao mo hanatazu, tada kuitsuki itari. Aruji miru ni, nagasa ni jō amari naru ja nari. Aruji tachi wo nukite ja wo kirikoroshite, inu wo hiki-hanashikeri. Kore wa kono ki no ue ni daija no sumikeru wo shirade, sono utsubo ni yorifushikeru wo, ja no noman tote orishi wo mite, inu wa hoekeru nari. Inu naku shite kono ja ni makarenaba, tasukaran ya. Waga tame ni wa narabi naki chū aru inu nari tote, gu shite ie ni kaerishi to nan katari-tsutaetaru to nari.

III.

INU ŌI NARU JA WO KOROSU.

Ima wa mukashi, Mutsu no kuni ni sumikeru iyashiki mono ari. Ie ni amata no inu wo kaite, tsune ni gu shite miyama ni irite, i-shika wo torasuru koto wo chūya akekure no waza to su. Inu mo aruji ga yama ye ireba, yorokobite atosaki ni tachite yuki, i-shika wo kuikorosu wo yaku to su. Kaku suru koto wo yo no hito inuyama to iu narubeshi. Kakaru toki wa, shokumotsu wo mochite futsuka mika mo yama ni todomaru koto ōshi. Aru toki kono otoko rei no gotoku inu domo wo gu shite yama ni irite, sono yo wa ōi naru ki no utsubo ni irite; katawara ni yumi, ebira, tachi wo oki, mae ni hi wo taki, inu domo wa meguri ni mina fushitarikeri. Shikaru ni, yo fukete inu domo yoku neiritaru ni, toshigoro sugurete kashikoki inu arishi ga, niwaka ni okihashirite aruji ni mukai obitadashiku hoekereba; aruji wa nani wo hoyuru ni ya to, ayashiku omoite mi-megurasu ni, hoyubeki mono nashi. Inu wa nao hoe-yamazū shite, aruji ni mukaite odori-kakari odori-kakarite shikiri ni hoyu. Aruji odorokite hoyubeki mono mo naki ni kaku aru wa,

gotoshi. Shikaru ni, kono futoku wo motte sambyaku nen no taihei wo hiraki, shūsho wo totan ni sukuitaru wa kidan ni arazu ya? Sono ta Yoritomo nite mo, Nobunaga nite mo, isshin no gyōjō wo ron-zureba, zannin, koku-haku, sagi, hampuku, nikumubeki mono ōshi to iedomo; mina ichiji no kanka wo yame, jimmin no satsuriku wo sukunaku shitaru wa nan zo ya? Akunin mo kanarazu shimo zen wo nasazaru ni arazaru nari. Hikkyō kono hai no eiyū wa shitoku ni ketten ari to iedomo; sōmei eichi no hataraki wo motte, zen no ōi naru mono wo nashitaru jimbutsu to iubeshi. Itten no kizu wo mite, zempeki wo hyō subekarazaru nari.

IV.

TAMA NI KIZU ARI.

Tokugawa Ieyasu wa ransei no nochi wo uke, shippū yoku-u, kannan wo habakaraku shite, tsuini sambyaku nen no taihei wo hiraki, tenka wo Taizan no yasuki ni okitari tote, konnichi ni itaru made mo sono kōgyō no bi wo shō sezaruru mono nashi. Jitsu ni, Ashikaga no bassei kaidai funjō no toki ni atatte, Ota, Toyotomi no kōgyō mo imada sono motoi wo kataku suru koto atawazu. Kono toki ni Ieyasu nakariseba, izure no toki ka taihei wo ki subeki ya? Jitsu ni, Ieyasu wa sambyaku nen kan taihei no fubo to iubeshi. Shikaru ni, kono hito no isshin ni tsuki sono tokugi wo sassureba, hito ni hazubeki mono sukunakarazu. Nakanzuku, sono Taikō no itaku ni somukite Ōsaka wo hogo suru nō i naku; koto ni, taku seraretaru Hideyori wo tasukezu shite, kaette sono yūya anjaku wo yōsei shi; Ishida Mitsunari no nozokubeki wo nozokazu shite, gojitsu Ōsaka wo taosu no baishaku ni noko-shitaru ga gotoki wa, kankei no hanahadashiki mono to iubeshi. Kono ichijō ni tsuite wa, Ieyasu no mi ni wa itten no tokugi naki ga

raru-majiki mono wo tote, onajiku tsuzukite satto zo uchiiritaru. "Kōmyō sen tote fukaku su na yo, Sasaki Dono. Kawa-soko ni wa sadamete ōzuna aran. Uma norikakete aya-machi su na," to iikeredomo, mimi ni mo kiki-irezu watashikeri. Kawanaka made wa tagai ni otoraji makeji to watashi-kereba, izure otoreri to mo miezarikeru. Saredomo, Sasaki wa kawa no annai wa shiritari, tenga ichi no Ikezuki ni wa noritari, uma no ashi ni kakarikeru ōzuna wo ba tachi wo nukite futsu futsu to uchikiri uchikiri, sashimo ni hayaki Ujigawa naredomo, koto to mo sezu, ichi-monji ni satto watashite, omou tokoro ye uchiagaritari. Kajiwara mo otorazu watashikeru ga, kawanaka nite ōzuna ni uma wo norikake no tame, kata ni oshisagerare, haruka no shimo yori uchiagetari. Sate koso Ujigawa no senjin Sasaki, nijin Kajiwara to nikki ni mo tsukerare-tarikere.

V.

UJIGAWA NO SENJIN.

Byōdōin no ushitora, Tachibana no Kojimagasaki yori musha koso ni-ki ide kitare. Hitori wa Sasaki no Shirō, hitori wa Kajiwara Genda, Ikezuki, Surusumi ni noritsurete hikkake hikkake zo ide-kitaru. Hitome ni wa nani to mo mienedomo, kokoro bakari wa tagai ni saki wo arasoikereba; Kajiwara Genda, Sasaki ni yumi dake bakari zo susumitaru. Sasaki saki serarubeku ya omoiken, "Ikani, Kajiwara Dono, Tōgoku ni wa Tonegawa, Saikoku ni wa kono kawa wo koso Nippon ichi-ni no daiga to wa mōse; naka ni mo kono kawa wa ue mo shita mo hayaku shite, uma no ashikiki sūkunashi. Gohen no uma no harubi no nobite miyuru wa, kawanaka nite kura norikaeshi, ayamachi shi tamō na. Shime tamae," to iwarete; Kajiwara, sa mo aran tote, tazuna wo ba uma no yugami ni sute abumi fumihari tsuitachi agari, futa-shime mi-shime hikishimekeru hima ni, Sasaki tsu to hase-nukite kawa ye zabu to zo uchiiritaru. Kajiwara kore wo mite, sate wa wagimi wa Kagesue wo tabakari-keru zo ya; sono gi naraba ichido made mo tabaka-

4. *Fuyu no yosamu no asaborake,
Chigirishi yamaji wa yuki fukashi.
Kokoro no ato wa tsukanedomo,
Omoiyaru koso aware nare.*
-

VI.

Haru no Yayoi.

1. *Haru no Yayoi no aketono ni,
Yomo no yamabe wo miwataseba,
Hanazakari ka mo shirakumo no
Kakararu mine koso nakarikere.*
2. *Hanatachibana mo niou nari;
Noki no ayame mo kaoru nari.
Yugure-sama no samidare ni
Yama-kotogisu nanoru nari.*
3. *Aki no hajime ni narinureba.
Kotshi mo nakaba wa suginikeri.
Waga yo futeyuku tsukikage no
Katabuku miru koso aware nare.*

Tokyo, Hyōbashi Bu,
 Takechō, 13 banchi,
 18 nen, 3 gatsu 25 nichi.

Omori Umetarō Sama,

Konnichi wa tenki ga hanahada
 yoroshū gozarimasu kara, gogo yori
 Kamaido no ume wo mi ni o ide
 nasarete wa ikaga de gozarimasu? Go
 doi naraba, 10 ji goro made ni
 watakushi kata yo o ide wo negaimasu.

Sugita Umenosuke

○第卅五節 手紙の書き方は漢字假名混淆の通常文の如く拜啓仕候
 陳者何々敬具杯の文体に書きても宜しけれども左の例の如く西洋風
 に書きても事足べし

切手

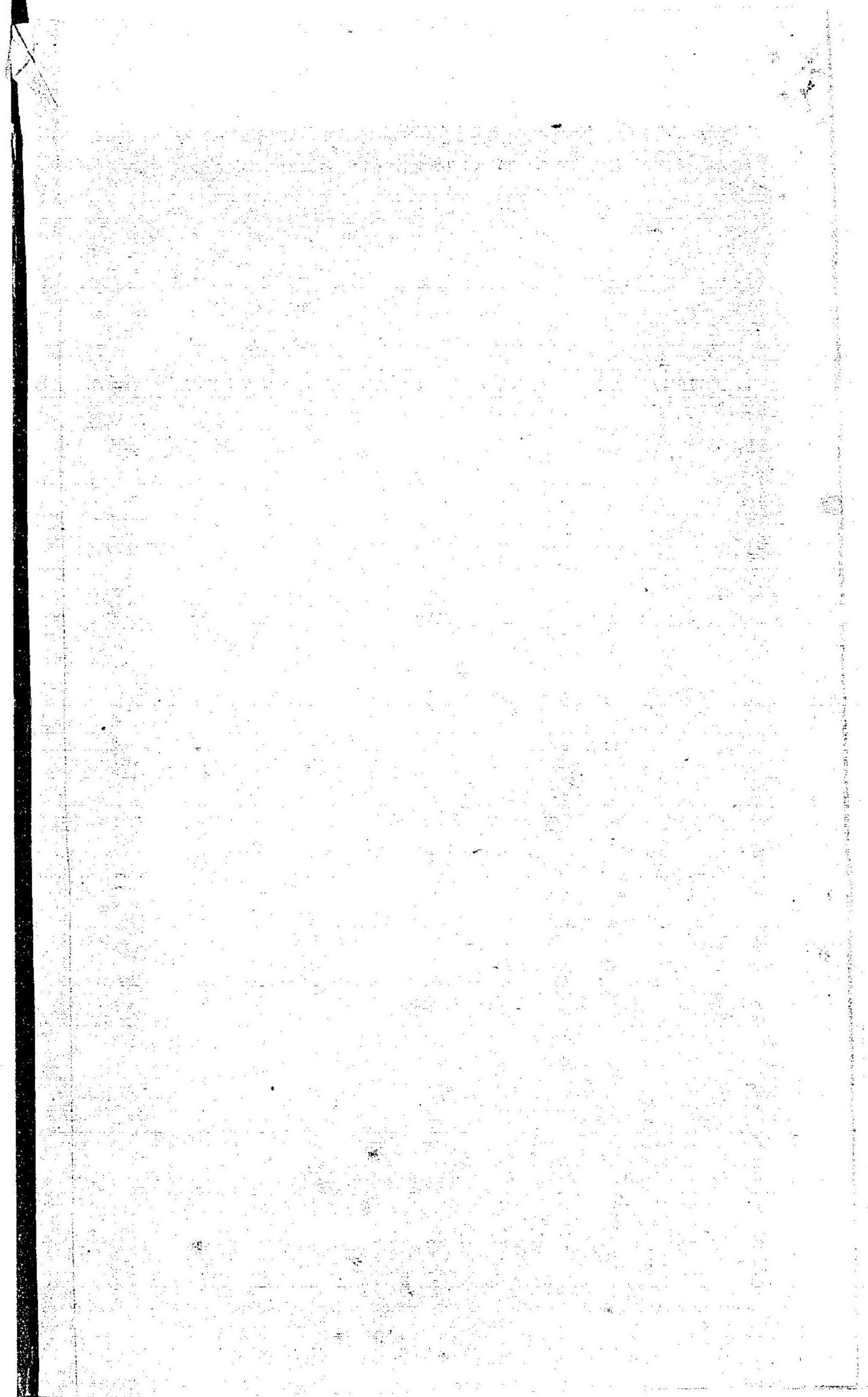
Omori Umetarō Sama,
Nishimbashi Ku,
Matsuchō, 26-banchi.

KANA TO RŌMAJI TO NO HIKAKU-HYŌ.

ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a ア a
イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i イ i
ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u ウ u
エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e エ e
オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o オ o

カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka カ ka
キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki キ ki
ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku ク ku
ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke ケ ke
コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko コ ko

カ ka
キ ki
ク ku
ケ ke
コ ko



羅馬字會規則

明治十八年一月十七日議定

第一條 本會ハ日本語ヲ書クニ是迄用キ來レル文字ヲ廢シ羅馬字ヲ以テ之ニ代ヘンコトヲ目的トス

第二條 本會ヲ羅馬字會ト名ツク

第三條 會員ノ中ヨリ事務委員十五名ヲ撰舉シテ本會ノ雜務ヲ掌ラシムベシ

第四條 事務委員ハ委員中ヨリ幹事二名ヲ撰舉シテ本會ノ記録及通信等ヲ掌ラシムベシ

第五條 事務委員ハ會員ノ中ヨリ會計一名ヲ撰舉シテ本會ノ會計ヲ掌ラシムベシ

第六條 事務委員幹事會計方ハ其任期各々一ケ年トス

第七條 毎年一度年會ヲ開キ事務委員ヲ改選シ及ヒ其他ノ事ヲ議スベシ

第八條 臨時會ハ事務委員必要ト認ムルトキハ之ヲ開クコトヲ得

第九條 學術上ニ關係スル事務ハスベテ臨時ニ委員ヲ撰舉シテ之ヲ取調ベ且ツ議定セシムベシ

但シ會員ニシテ諸學校ノ學生生徒タル者ハ會費トシテ一ケ年ニ金四拾錢ヲ納ムベシ

第十一條 本會ノ副則ヲ改正増補スルハ事務委員ノ權限内ニアル者トス

第十二條 此規則ヲ改正増補セント欲スルトキハ會員十名以上連合シ年會ヨリ一ケ月前ニ於テ事務委員ニ申シ込ミ事務委員ハ直ニ其動議ヲ會員一般ニ通知シ年會ニ於テ出席會員ノ多數ヲ以テ之ヲ議決スベシ

但シ會員一名ニテモ此ノ規則改正増補ヲ申シ込ミタルトキ事務委員之ヲ必要ト認ムレバ本文ノ手數ヲ經テ其動議ヲ年會ニ提出スルコトヲ得

第十三條 會員若シ退會スルモ既納ノ會費ハ之ヲ返附セサルベシ

羅馬字會副則

明治十九年一月廿六日改正

第一 本會ノ年會ハ三月中東京府下便宜ノ場所ニ於テ開キ其時日場所等ハ豫メ幹事ヨリ廣告スベシ

第二 會費ハ毎年三月ニ納ムベシ

第三 事務委員ヲ撰舉スルニハ委員タラント欲スル東京住居ノ會員毎年一月三十一日マデニ自ラ其名ヲ幹事ヘ申込ミ幹事ハ之ヲ全國會員ニ廣告シ會員ハ其中ヨリ十五人ノ名ヲ記シテ二月二十八日迄ニ幹事ヘ送ルベシ事務委員ハ其集會ニ於テ投票ヲ數ヘ其多數ヲ得タル人十五名ヲ翌年ノ委員ト假リ定ムベシ但シ投票ノ數同キ人二人以上アリテ總數十五人ヲ超ルルハ事務委員ノ投票ニ依テ其中ヨリ撰舉シテ定數ヲ超ヘザラシムベシ幹事ハ年會ニ於テ此新キ委員十五人ノ名ヲ報告スベシ

第四 臨時委員撰舉ノ方法ハ事務委員ガ臨時ニ定ムル處ニ依ルベシ

第五 凡委員中死去、他行其他ノ事故ニ依テ欠員アルハ委員ハ自ラ其欠ヲ補フコトヲ得

第六 時々ノ報告及其他ノ出版物ハ事務委員悉皆之ヲ擔當スベシ

第七 入會セント欲スル者ハ住所、姓名、族籍、職業ヲ記シテ幹事ニ申込ムベシ

第八 月々ノ雜誌ハ無代價ニテ會員ニ頒ツモノトス其他ノ出版物ト雖モ無代價ニテ會員ニ頒ツアルベシ

東京神田區北神保町十五番地

羅馬字會

羅馬字會役員

事務委員

矢田部良吉	外山正一	神田乃武	鳩山和夫	チャンバレン
箕作佳吉	寺尾 壽	山川健次郎	テヒヨウ	後藤牧太
高松豐吉	櫻井錠二	松井直吉	増島六一郎	穂積陳重

幹事

矢田部良吉

會計方

高松豐吉

書キ方取調委員

西村 貞	磯野徳三郎	木下廣次	櫻井房記	三輪桓一郎
末廣重恭	谷田部梅吉	中村彌六	鳩山和夫	和田垣謙三
ブリントンクレー	チャンバレン	イビ	テヒヨウ	ホル
那珂通世	矢田部良吉	山川健次郎	隈本有尙	石田氏共

第九條 學術上ニ關係スル事務ハスベテ臨時ニ委員ヲ撰擧シテ之ヲ取調ベ且ツ議定セシムベシ

但シ會員ニシテ諸學校ノ學生生徒タル者ハ會費トシテ一ケ年ニ金四拾錢ヲ納ムベシ

第十一條 本會ノ副則ヲ改正増補スルハ事務委員ノ權限内ニアル者トス

第十二條 此規則ヲ改正増補セント欲スルトキハ會員十名以上連合シ年會ヨリ一ケ月前ニ於テ事務委員ニ申シ込ミ事務委員ハ直ニ其動議ヲ會員一般ニ通知シ年會ニ於テ出席會員ノ多數ヲ以テ之ヲ議決スベシ

但シ會員一名ニテモ此ノ規則改正増補ヲ申シ込ミタルトキ事務委員之ヲ必要ト認ムレバ本文ノ手數ヲ經テ其動議ヲ年會ニ提出スルコトヲ得

第十三條 會員若シ退會スルモ既納ノ會費ハ之ヲ返附セサルベシ

羅馬字會副則

明治十九年一月廿六日改正

第一 本會ノ年會ハ三月中東京府下便宜ノ場所ニ於テ開キ其時日場所等ハ豫メ幹事ヨリ廣告スベシ

第二 會費ハ毎年三月ニ納ムベシ

第三 事務委員ヲ撰擧スルニハ委員タランコトヲ欲スル東京住居ノ會員毎年一月三十一日マデニ自ラ其名ヲ幹事ハ申込ミ幹事ハ之ヲ全國會員ニ廣告シ會員ハ其中ヨリ十五人ノ名ヲ記シテ二月二十八日迄ニ幹事ヘ送ルベシ事務委員ハ其集會ニ於テ投票ヲ數ヘ其多數ヲ得タル人十五名ヲ翌年ノ委員ト假リ定ムベシ但シ投票ノ數同キ人二人以上アリテ總數十五人ヲ超ルルハ事務委員ノ投票ニ依テ其中ヨリ撰擧シテ定數ヲ超ヘザラシムベシ幹事ハ年會ニ於テ此新キ委員十五人ノ名ヲ報告スベシ

第四 臨時委員撰擧ノ方法ハ事務委員ガ臨時ニ定ムル處ニ依ルベシ

第五 凡委員中死去、他行其他ノ事故ニ依テ欠員アルハ委員ハ自ラ其欠ヲ補フコトヲ得

第六 時々ノ報告及其他ノ出版物ハ事務委員悉皆之ヲ擔當スベシ

第七 入會セント欲スル者ハ住所、姓名、族籍、職業ヲ記シテ幹事ニ申込ムベシ

第八 月々ノ雜誌ハ無代價ニテ會員ニ頒ツモノトス其他ノ出版物ト雖モ無代價ニテ會員ニ頒ツコトアルベシ

東京神田區北神保町十五番地

羅馬字會

羅馬字會役員

事務委員

矢田部良吉	外山正一	神田乃武	鳩山和夫	チャンバレン
箕作佳吉	寺尾 壽	山川健次郎	テヒヨウ	後藤牧太
高松豊吉	櫻井銳二	松井直吉	増島六一郎	穂積陳重

幹事

矢田部良吉

會計方

神田乃武

高松豊吉

村岡範爲

書キ方取調委員

西村 貞	磯野徳三郎	木下廣次	櫻井房記	三輪桓一郎
末廣重恭	谷田部梅吉	中村彌六	鳩山和夫	和田垣謙三
ブリンクレー	チャンバレン	イビ	テヒヨウ	ホー
那珂通世	矢田部良吉	山川健次郎	隈本有尙	戸田氏共
箕作佳吉	巖谷立太郎	櫻井銳二	北尾次郎	外山正一
土方 寧	後藤牧太	寺尾 壽	山口銳之助	櫻井省三
高松豊吉	高橋健三	増島六一郎	松村任三	三宅雄次郎
藤岡市助	小島憲之	松井直吉	山田堯扶	神田乃武

明治十八年六月十八日版權免許
同年同月出版

定價金拾錢

著者兼
出版人

東京府平民

矢田部良吉

發行所

東京麴町區富士見町
四丁目十一番地

羅馬字會

東京神田區北神保町
十五番地

大賣捌所

澤屋蘇吉

東京神田裏神保町

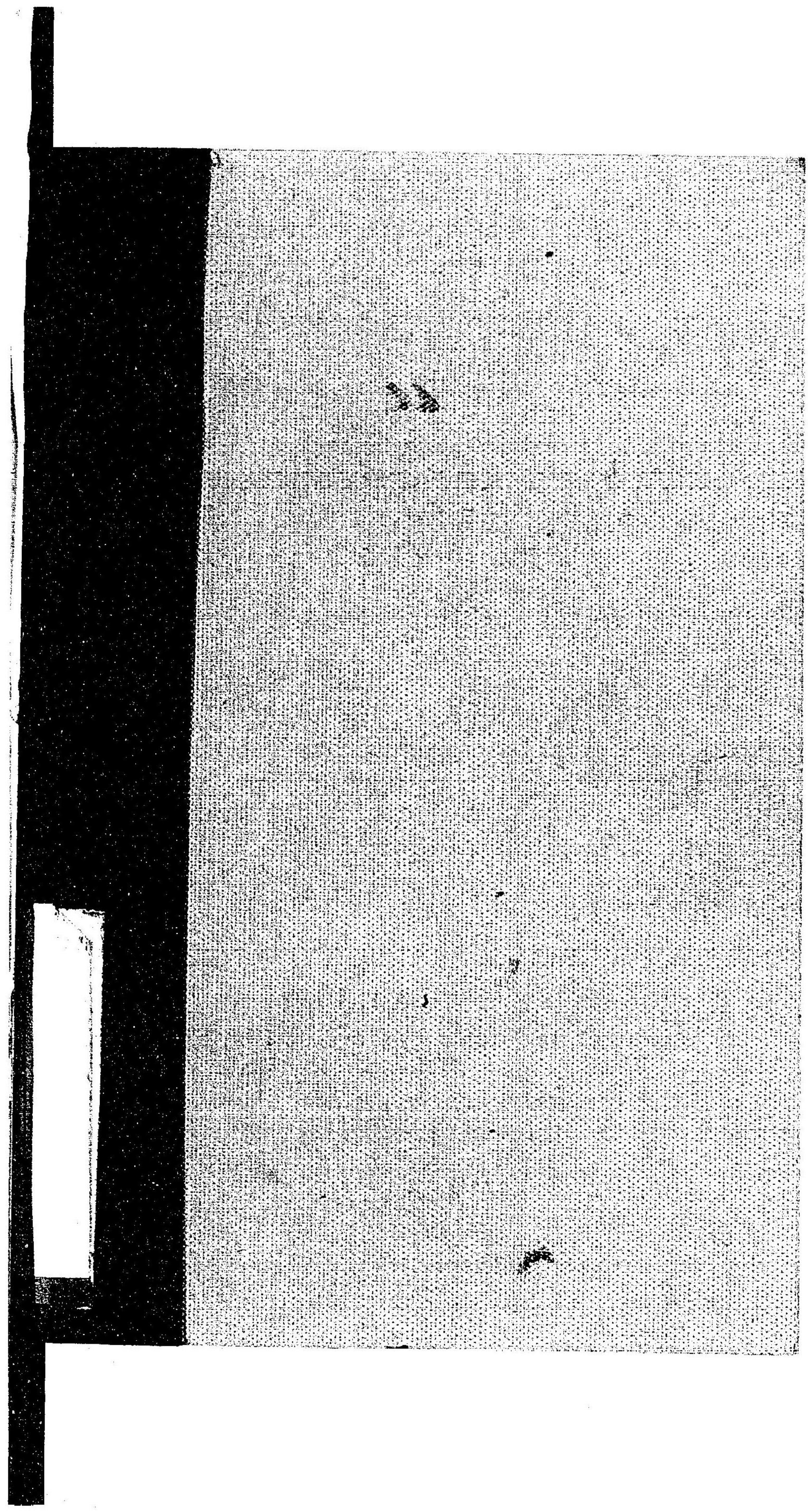
丸善書店

東京日本橋通三丁目

IF 2N29

四
折

55



811.8
Y629r

(M)

羅馬字早學

矢田部良吉

国立国会図書館

077341-000-6

811.8-Y629r

羅馬字早學

矢田部 良吉/著

M18.6

DAC-0540

